有識者懇談会の主な意見の状況【令和4年度】

資料3

視点		有識者懇談会委員から出された関連意見
新博物館の目指すべき姿に関する意見	【視点1】 山形ならではの特色を打ち出すこと	・山形県の4地域は、それぞれ特性がある。各地の食文化、祈りの文化、民話、方言、自然、地形、最上川の歴史、樹氷など、山形にしかない、山形県ならではの文化、歴史、自然を、現代の生活につなげて紹介することで身近に感じ魅力になる。
	【視点2】 次世代への継承	・「普遍的な価値」があるものをブラッシュアップし、なぜそれが大事なのか、残していかなくてはいけないのか考えるきっかけをつくることにより、郷土への愛着につながる。 ・社会が変わっていく中で、博物館が収集している変わらないもの(リアル)に大きな価値が生まれる。変わらないものへの安心感が、人が集まるということに繋がるのではないか。
	【視点3】 観光誘客など交流人口の増加により地域の活力向上につなげること	・その土地の人々の暮らしと関連したもの、風土を作ってきたものには魅力があり、その魅力は観光誘客にもつながる。 ・博物館の内容だけではなく、交通政策、観光政策も含めた広い視点で考える必要がある。周辺の商業施設や地域企業との連携により経済効果を高めることが重要である。 ・博物館の収益性が担保できることで、地域、子ども達、文化財の保存・修復にも還元できる。 ・博物館という「点」だけでなく、まちに広がり「面」で盛り上がっていくことが必要。まちづくり、ホテルや商業施設などと連携した経済効果も重要。さらに、生み出された利益の一部を博物館の充実に使うような仕組みができれば、地域内でお金が循環するので良い構造になる。
	【視点4】 県内博物館等のネットワークの核としての役割	・山形県を一つの博物館ととらえ、各地域の小さな博物館や資料館等を横につなぐプラットフォームとなるのが、メインとなる県立博物館の役割。 ・それぞれの地域の文化を継承するのが、それぞれの地域の博物館であり、それらをつなげるのが県立博物館の役割。 ・これからは横の連携が必要になる。博物館の目的に、教育、研究、楽しみなどがあり、これらは観光、移住に繋がっていく。 ・地域、産業、自治体同士など、さまざまな立場の連携がある。何のために連携するのか、目的がはっきりしていないと連携のための連携になってしまいうまくいかない。 ・ジオパークやジオサイトという地質遺産や文化遺産の中核施設となってほしい。また、学術面でバックアップする施設となってほしい。 ・デジタルアーカイブや出張出前博物館、資料の貸し出しなど、色々な手段で山形県内の地域博物館のネットワークの中核となってほしい。一方で、都市の博物館と山村の博物館は異なるため、例えば都市型の博物館のあり方のモデルとして、他の博物館の模範になるということも良いと考える。 ・県内博物館はそれぞれの館で異なる課題を抱えているが、共通の課題もある。自分達だけでは解決できない問題を横のつながりで解決できる。それぞれが得意分野を生かしながら一緒にやっていけばうまくいくと考える。山形県全体の博物館をバックアップするような機能を持ってもらえると良い。
	【視点5】 誰にでも利用しやすいインクルーシブな施設を目指すこと	・インクルーシブな視点が重要であり、誰にでも利用しやすい博物館を目指す必要がある。そのためには、施設面での問題と人間でケアできる問題を分けて検討する必要がある。 ・インクルーシブな視点の最も重要なことは、多様な視点を持って進めていくデザインプロセスである。プロセスも含め、一体となったデザインをスタートしていく必要性を感じた。 ・一般の方とのコミュニケーションが進んでいくことでインクルーシブが生まれてくる。一般の方と一緒につくっていくことが重要。
	【視点6】 災害への対応力強化	・地形や地質の遺産を中心とした景観であるジオパークとの連携ができれば面白い。宮城県には、ジオパークである三陸の国立公園に震災の遺構があり、災害の啓発や防災に役立てることが出来る。 ・断層を保存するような博物館など、災害の記憶を風化させない、防災の記憶を残していくような役割になれば良い。
	【視点7】 山形県全体を見据えること	・まちづくりを担うという視点と、一方で、県立博物館ということから、一つのまちでだけでなく、山形県全体、県内4地域を見据えた大きな視点で考えるべき。
	【視点8】 県民が主役になる居場所となること	・生まれたときからその場所にあって、大きくなってもあって、自分が子供を産んだときに連れて行くといった、自分の生活の中に馴染むような要素があると良い。 ・観光客ばかりでなく、自分たちが主役になれるような居場所づくりもポイントとなる。

視点		有識者懇談会委員から出された関連意見
博物館が担うべき機能に関する意見	【視点9】 研究機関としての機能の充実	・博物館の魅力を伝える基礎となる研究機能が重要であり、研究機関として位置づけることが重要。 ・博物館の資料を研究対象として考えられるように、いろいろな方がアクセスしやすいようにすると、直接研究したり、山形での暮らしを考えたり、研究職を求めたりすることにも繋がる。 ・リアルだけでなくデジタルでもアクセスできるということが重要。様々な地域や世界、時代を超えてアクセスができる事が興味関心に繋がる。また、アクセスしやすいということをオープンにわかりやすく発信していくことが必要。 ・博物館は「ヒト」が作っていくものであり、学芸員の研究環境の整備も含めた人材育成のあり方や大学等との高度人材の共有などについて議論が必要。 ・学芸員にスポットを当てて発信していく事も面白い。熱量が高く、興味深い話をしてくれる方がいる。学芸員のトークバトルなどを見てみたい。 ・高度な人材を社会の様々なところで共有していくという考え方がある。大学教授やデザイナーなどを一部共有していく柔軟な発想もある。 ・資料を蓄積していくことにより何かを生み出していく学術的な専門家の視点が必要。 ・今にもなくなってしまいそうな文化がたくさんある。それらをリスト化し残していくことはとても大事なこと。 ・「普遍的な価値」があるものをブラッシュアップし、なぜそれが大事なのか、残していかなくてはいけないのか考えるきっかけをつくることにより、郷土への愛着につながる。 ・専門家の意見交換の場や学びの場になるということが魅力になる。専門家が、例えばこの分野だったら山形県立博物館が詳しいよね、と学びに来るというようになれば良い。 ・博物館は、学ぶことを楽しむ、知識欲を満たす場であるべき。学芸員の熱意も人を惹きつけることができる。
	【視点10】 新しい博物館の重要な要素として、分野・機能・人材等を統合し、新たな価値を生み出す総合性を持つこと	・県立博物館が総合性を持っているということが非常に重要。総合性を持った時に新しい分野、統合的な分野が生まれる。統合して新しい知識を作っていくことができる。 ・色々な業種の方が一つの展示を作ったり、テーマとして調査研究をしていくことで、面白い展示ができる。 ・総合博物館であるということ、あらゆる分野が一緒になっていることが大事。あらゆる方々に関わっていただかなければならない。その中核に山形県立博物館がなってほしい。 ・アジャイルという言葉で表されるように、変化する、いつでも変わっていく、こだわらないという事がすごく重要。 ・博物館の「館」という名前が、建物をイメージしてしまうため、これを変えていかなくてはいけない。博物館は「機能」であり、そのような考え方で新構想を検討すべき。分野の総合性だけでなく、リアルとデジタル、データに基づく技術的な学びと鑑賞に基づく感性の学びなど、機能の総合性は非常に大事。
	【視点11】 集客力向上への取組み	・例えば、食文化や歴史を紹介する展示企画と関連づけて、在来野菜を買ったり、郷土料理を食べられる施設があると、収蔵資料の理解が深まり、展示企画からの誘導もでき、集客につながる。 ・博物館に求められているニーズを学芸員が把握し、学術的に必要なことをつなげることが重要。 ・ニーズを探ることが非常に大事。その際、データ(事実)をベースに考えるべき。
	【視点12】 ファンを掴む取組み	・ファンの入口を掴むのが大事。寄附の窓口を作り、クラウドファンディングやボランティアなど、支えの仕組みを作る。支え手と博物館の関係性をどんどん濃くしていくのが良い。 ・県民になじみのある場所にするためのゆるキャラ、愛称など民間のブランディング手法も必要。 ・関係人口を増やし、来館者データを集め、意見やアドバイスをいただく事が大事。 ・利用者の足跡、効果をストックしていくが大事。そうすることで、教育現場、高齢者など分野、年代、地域で求められていることが分かるのではないか。 ・博物館の裏側を見せるような企画、普段展示していない資料の展示、ヤマガタダイカイギュウのぬいぐるみなど県民によって作られたクラフト品の販売などの取組が出来ると面白い。
	【視点13】 多様な主体との協働	・東北芸術工科大学の文化財保存修復学科など大学との連携を是非して欲しい。また、保存修復研究センターの活用は地域文化財を守っていくことにも役立つ。 ・他の県立の施設との関係など既存の博物館との連携及び位置づけの整理が大事。 ・博物館で全てを担うのではなく、県産業科学館など既にある施設と機能を分担する形もある。
	【視点14】 誰でも博物館を活用できるような取組み	・住民の学べる場づくりなど、コミュニティの参加や誰でも活用できるような配慮が必要。 ・障がいをデザインの力で解決するインクルーシブな博物館、“見る”だけでなく“感じる”“触れる”博物館を目指してほしい。障がい者福祉にもつながる。
	【視点15】 子どもの利用促進	・民話を絵本にしたり、体験型の展示とするなど、子ども達が興味を持つような取組みがあると、博物館に行くきっかけになり、楽しく遊びに行ける。 ・学校で学んだことを補完できる展示企画があると、休日に家族で訪れる。親も郷土について学びなおして子どもに伝えていきたい。 ・子ども達だけで訪れることができる企画を実施してほしい。 ・ファミリー層向けの催し物は確実に支持されるので定期的に開催する必要がある。さらには、少し博物館には足が向きにくい層を掘り起こす意味でも女性達の自己研鑽の場といった要素も必要。

視点		有識者懇談会委員から出された関連意見
博物館が担うべき機能に関する意見	【視点16】 デジタルの有効活用	・開館までの変化を見据えて、その中で、リアルならでは、オンラインならではの体験を設計することが重要。 ・通常の展示とARやVR技術等を組み合わせて、ハイブリッド型の体験的な楽しみができると学びも多く楽しめる。 ・博物館法改正され、コロナ禍の中、デジタルアーカイブ化が業務として入ってきた。家にいながら博物館の展示を見て、博物館にいって実物を確認するなどがこれからのスタイルになるのではないか。 ・直接来館とデジタル上での利用という2つの利用法は並走していくと思われる。 ・山形県の4地域をまとめるようなデジタルの活用と実体験の場としての博物館という形が、県外と県内のニーズそれぞれに合致するのではないか。 ・単に博物館資料をデジタル化するだけではなく、組織をデジタル化していかなくてはならない。地域の施設それぞれがフルスペックでデジタル化するのではなく、統一したデジタル化により横断的に結ぶなど組織横断的な動きが大きな課題であり、実現できれば効率化が進む。 ・SNSやYouTubeといった動画を利用し、コンセプトや展示作業をチラ見せしたり、メイキング画像を見せるような動画があっても面白い ・社会問題として格差の問題がある。誰でもアクセスできるよう、多様な人と一緒につくっていく博物館でなければならない。そのツールの一つがデジタルであるということ。そういう意識で使い分けていけば、バーチャルとリアルはぶつかり合うものではなく、融合的にやっていける。 ・資料のデジタル化に取り組むということは困難であるが非常に大事。そういうことをこれから10年、ネットの配信と実物展示の両輪でやっていくことが効果的である。 ・デジタルアーカイブには力を入れた方が良い。未完成な分野だからこそ、県としてきちんと予算と人材を投入して考えていく必要がある。 ・博物館の経営や運営分野でのデジタル活用も重要。DX化により負担を減らし、業務に集中できるようなデジタル化も重要。
	【視点17】 リアル（実物）の重要性	・実物があるということはどういうことか、実際に行って触れることの意義について、もう一度考える必要がある。 ・デジタルアーカイブは、興味がないものを素通りしてしまうが、博物館に行ったら、興味がなかったけど意外と面白そうだと感じたものとか、新しい発見や違う興味が生まれることがある。また、自分の目で作品全体の雰囲気を見たいと強く思う。こういうことが実物を見る意義なのではないかと思う。
	【視点18】 実験場的なプログラムの実施	・その時代に応じたものが展示できるような自由な部屋があると面白い。 ・食文化や風習など、将来に残したい情報を伝えるため、おばあちゃんの手仕事などを見せることができる自由な部屋をつくると、様々な人がきて、後継者育成などにもつながるのではないか。 ・様々な企画に挑戦できる実験場的な場所やプログラム、一回試しにやってみる機能があるとよいのではないか。それをデジタルで実現することもよい。 ・山形駅の周辺に、簡易なもので良いので、コミュニティの維持やつながる場所となる実体のある取組が出来る拠点があると良い。リビングラボのような形で他の人との関わりの中において、実験をするということが非常に大事。観光客のような外部の目に触れるところで実現していくとブラッシュアップされてくる。 ・小さいラボが無数にあることで結びつきがたくさん生まれ、身近な自分事として、博物館を考えられるきっかけになりそうだと感じた。
	【視点19】 効果的な情報発信	・情報の更新、発信が重要で難しいこと。関係者それぞれがサイトの情報を更新できるようにするなど参加型の情報の更新、発信ができれば、情報収集のスピードが速くなり、横のつながりもできる。 ・継続して来館者を確保するには、たくさんある収蔵資料から新たな魅力や見解等を提示し続ける必要がある。 ・博物館の仕事を多くの人に知ってもらうため、わかりやすく「見せる」ことが必要。博物館にまつわるすべての仕事・役割を見せることで、より興味を持ってもらえるのではないか。 ・情報が統一化されていると、直接探していない郷土料理や関連するイベントも目に触れやすくなる。どうしたら利用しやすいコンテンツになるかという視点が大事。

視点		有識者懇談会委員から出された関連意見
開館までの取組みに関する意見	【視点20】 開館までの取組み	・新博物館開館までの10年間に何ができるかということを考えたら良いのではないか。博物館の役割を多くの人に知ってもらうことが重要。 ・この間にコミュニティをつくり、成長させ、オープンにつなげていくような仕掛けができると面白い。 ・開館後継続していくためにも、開館までのプロセスの可視化と地域を巻き込むことが大事。 ・道の駅、物産館、駅や空港の一区画を利用した展示を行い、開館までのPRをすると良い。 ・一般の方を巻き込む事が開館前のPRに繋がる。参加型のシンボルがあると自分事と感じられる。 ・開館までのプロセスが大事。意義・定義の決定、建物の決定という2つのプロセスがある。 ・今後、何のためにやるかという「使命」と誰がどのように支えるのかの「マネジメント」について議論しなければならない。 ・目標（アウトカム）について、来館者数だけではなく、例えば、人々の幸福、well-being（ウェルビーイング）などを目標として設定し、博物館の成果をきちんと評価する必要がある。入館者数だけではないやり方にしていかないと、社会全体に影響を与えるような博物館にならないのではないか。 ・目標（アウトカム）については、数値的な目標を考えた場合、アウトカムの段階で二段階、三段階のものを作って、最終段階にwell-being（ウェルビーイング）のようなものを設定することが重要。 ・運営する人員、来館者ともに減少していくことは止められる事象ではない。どうやってプロジェクトを進めていくのかが大切。莫大な予算を博物館事業だけに回すのは難しいと考えられるので、横断型として各部署と一緒に協力することが重要。 ・博物館というと、どうしても建物にこだわってしまうが、建物というのは一つの手段であって、そこにある機能が広がっていくという考え方をした方が良い。博物館という言葉をやめてミュージアムと呼ぶのが良いと思う。コミュニティの発想を踏まえて、一般の方と意見交換をしながら、ミュージアムをデザインしていく事がこれからは重要。 ・具体的なアイデアや企画を考えていくための分科会、ワーキンググループを組織して議論していくことが重要。 ・博物館法施行規則の一部改正により、博物館の登録を行うに当たって参酌すべき基準が策定された。博物館の目指すべきものが何かということが基準に示されており、そこを目指していく必要がある。